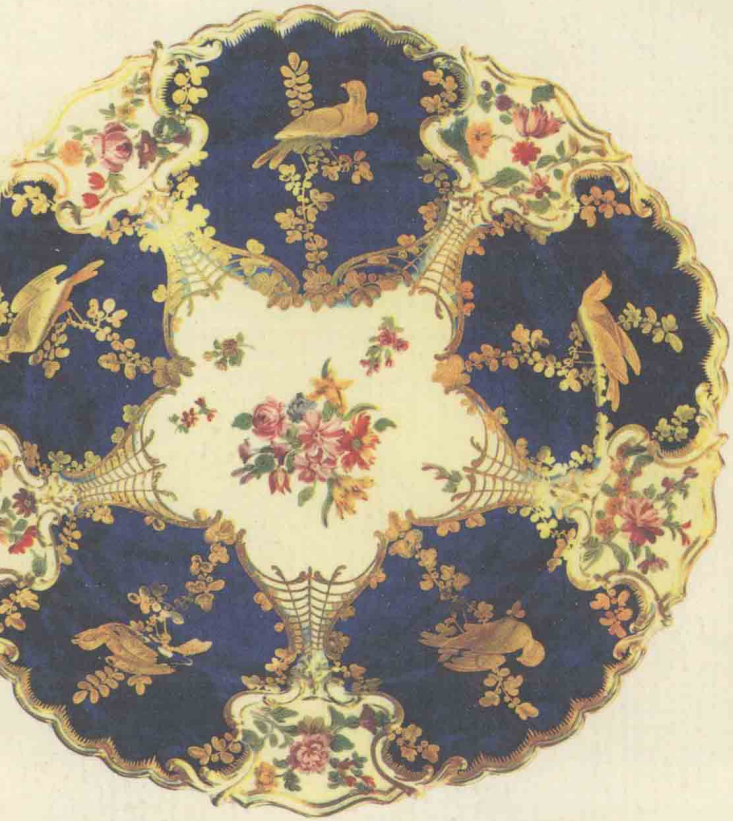

森亮訳詩集

晩国仙果

Ⅲ 近代イギリス

森亮訳詩集

晩国仙果

Ⅲ

近代イギリス

小沢書店

森亮（もり　りょう）
一九一一年、大阪生まれ。一九三六年、東京大学文学部英文科卒。旧制松江高校教授、島根大学教授、お茶の水女子大学教授を経て、八八年まで梅花女子大学教授。現在、島根大学名誉教授。
訳詩集『ルバイヤット』『白居易詩鈔』『ロセッティ小曲』『ヘリック詩鈔』のほかに、詩集『庭と夜のうた』、論考・研究に『夢なればこそ』『小泉八雲の文学』などがある。

晩国仙果Ⅲ　近代イギリス
平成三年三月二十日　初版発行

訳者　森　亮
発行者　長谷川郁夫
発行所　株式会社小沢書店
東京都千代田区飯田橋四-二-二　郵便番号一〇二
電話　東京(〇三)三二六三-九二一八(代表)
振替　東京八-四四七四五
印刷　第二整版　製本　大口製本
© R. Mori, 1991　Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ヘリック詩鈔……9
ロセッティ小曲……123
ハーディ小詩選……179
そむかれたる雄の人魚……207
イギリス詩選……219
注解……247
あとがき……323
作品細目……327
書誌……341

晩国仙果　Ⅲ

近代イギリス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヘリック詩鈔

はしがき

十四世紀にイタリアで始まつたルネッサンスは西方に向かつてゆるやかに、かなりの時間をかけて広がつて行つた。その西のはづれのイギリスでも最盛期は十六世紀で、それが過ぎてからやうやく花開いた遅咲きの愛すべき一輪の薔薇がヘリックの詩集『ヘスペリディーズ』であつた。

一五九一年にテームズ川を前にした聖ポール寺院の近くで生れたロバート・ヘリックは、翌年父の不慮の死に遭つて淋しい少年時代を送つた。十七歳で亡き父と同業の金銀細工師であつた叔父の徒弟になつた。その後ケンブリッヂ大学に学び、ロンドンに帰つて文人、音楽家などと交はり、宮廷にも出入りした。一六二九年、三十九歳のときイングランドでもずつと西南端に近いデヴォン州のディーン・プライアーの牧師となり、クロムウェル等の内乱の際に寺領を追はれて都に帰つたが、王政が回復してデヴォンの旧寺領に戻り、一六七四年にその地で八十四歳の生涯を終つた。

詩人としてヘリックはどういふ道をたどつたであらうか。シェイクスピアのよき

友でありライバルでもあつた古典主義者のベン・ヂョンソンをヘリックは文学の師と仰いだ。若いヘリックのロンドンでの生活の最も花やかな時間は悪魔亭（ザ・デヴィル）に集つたヂョンソンとその一党の酒宴の席で過ごされたと言つてよからう。この古典主義者からの感化と彼生来の資質とでヘリックは端正で理智的な詩を書いたが、多少の情熱とお色気と茶目つ気とがそれに潤ひを添へてゐる。

デヴォン州へ行つてからも詩作の勢ひはとどまることなく、それに彼としては新しい分野の宗教詩まで加はつて詩嚢は大きくふくらんだ。「聖歌集」を巻末に据ゑた『ヘスペリディーズ』が出版されたのは一六四八年で、それは彼が寺領を追はれて帰京した翌年になる。田舎にゐてはむつかしかつた出版が、たまたまロンドンに帰つて来たために軌道に乗つたのであらうか。王政復旧の後、再びデヴォン州に戻つてからも詩を忘れたわけではあるまいが、晩年の仕事を伝へるものは何も残されてゐない。

詩集 Hesperides は一一三〇篇の詩からなる正篇に二七二篇の詩からなる Noble Numbers が加はつた合巻本であるが、初版のタイトル・ページに断つてあるやうに両者を併せた詩集全体を呼ぶのにも Hesperides が用ゐられる。正篇の世俗詩と「聖歌集」の宗教詩を合計すれば一四〇二篇になるが、ヘリックの作品には短い詩が多く、殊に知的な警句の二行詩が沢山まじつてゐるから、それを印刷して本にする場合、一冊本にしても分厚くて困るほどではない。

詩集の題名はギリシア神話に拠つてゐる。主神ゼウスの妻のヘラに贈られたといふ黄金の林檎がなる園を守つた四人姉妹のニンフたちの総称が Hesperides で、それが林檎園そのものの呼び名にもなつた。しかも園のある場所が世界の西の果ての幸(さきは)へる島と考へられてゐたところから、ヘリックはデヴォン州といふ西の国で作つた詩を収めた家集の標題に転用したのであつた。ロンドンで暮らした青壮年期の作品も多く入つてゐたが、都落ちした詩人といふ世人の印象を逆手に取つた命名と考へてよからう。

嘗て私はこの詩集 Hesperides の標題を邦訳しようと試みたことがあり、二種類の訳名を思ひ附いたが、この本では原詩集は（その片かな表記も、邦訳名も）表面には出さず、『ヘリック詩鈔』を書名にすることにした。本訳稿を雑誌「果樹園」に発表した際の標題「ヘリック詩抄」の最後の一字を同音同義の別字に改めただけである。「鈔」は当用漢字表にも常用漢字表にも入つてゐないが、いよいよ本にしようといふ時になつて私の好みでこれを採ることにした。

今も言つたやうに本訳稿は初め雑誌に載せるために用意した。全訳は最初から考へなかつたが、案外さまざまな内容が歌はれてゐて変化に富むヘリックの詩から各分野での秀作佳品を数多く選ぶやうに心掛けた。畏友田中克己・小高根二郎の両君を中心にして大阪で発行されてゐた小雑誌「果樹園」に昭和三十五年十二月号から

四十二年八月号まで七十三回に亙つて連載した。この雑誌は規則正しい月刊であつたから、この間に八回は休載したことになるが、あの雑誌があつたればこそ出来た仕事であつた。その後折りに触れて訳稿を読み返して部分的には手直しをしてゐるが、訳詩の一篇全体に響くほど大きく改めることは厳に慎んだ。

なほ訳詩について一言すれば、私の飜訳は原作を丁寧に読み、作者の言はうとしてゐることを日本語の詩として歌ひ直さうとする試みで、一口に言へば意訳を主義としてゐる。我儘な方針のやうに聞えるかもしれないが、私としては飜訳である以上原作の手のひらの上で忠誠のをどりを踊つてゐるにすぎないと思つてゐる。

昭和五十六年十一月中旬

寝屋川市木屋町の寓居にて

森　亮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com